



協力会だより

第47号

発行 山梨県立考古博物館協力会

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町 923

発行日 令和6年6月1日発行

電話 055-266-3881

ホームページ www.y-kyouryokukai.jp/

FAX 055-266-3882



県外研修：星くすの里たかやま黒耀石体験ミュージアム



星ヶ塔ミュージアム矢の根や



県内研修：宮光園

R5年度 主な活動

- 令和5年度考古博物館協力会総会 (4/8)
- ミュージアムショップ (4~3月)
- ボランティアガイド (5~3月)
- 学校勾玉作り・火起こし体験補助 (5~2月)
- こどもまつり (5/3・4)
- 常設展撤収作業 (6/29・30)
- 第40回特別展「星降る中部高地の縄文世界」 (7/8~9/3)
- 特別展ワークショップ (7/30)
- 巡回展「発掘された日本列島 2023」 (9/16~10/29)
- 常設展復旧作業 (11/3・4・5)
- 県民の日イベント「考古博タイムトラベラー」 (11/20)
- 考古博 de 春まつり (3/3)

R5年度 研修・勉強会

- 勾玉作り、火起こし研修 (4/15・19)
- 春季企画展勉強会 (5/13・24)
- ミュージアムショップ研修 (5/13・24)
- ボランティアガイド研修① (5/13・24)
- 特別展勉強会 (7/13・22)
- 列島展勉強会 (9/21・23)
- ボランティアガイド研修② (9/21・23)
- 県外研修 (11/11)
- 山の洲文化財交流展勉強会 (12/13・17)
- 県内研修 (2/17)
- ボランティアガイド研修③ (2/24・28)

写真で
振り返る
活動・研修・
勉強会記録

【体験補助研修(勾玉づくり・火起こし)】



【こどもまつり】



【常設展撤収・復旧作業】



【ボランティアガイド研修】



【特別展ワークショップ】



【春まつり】



【春季勉強会】【特別展勉強会】【列島展勉強会】【山の洲文化財交流展勉強会】



令和5年度 協力会総会

令和5年4月8日(土)、風土記の丘研修センターにて山梨県立考古博物館協力会総会が開かれ、18名の新会員を含む98名が、委嘱状を受け取りました。

10年間・20年間協力員を務めていただいている方々には、永年感謝状が贈呈されました。また記念品として、20年の方3名には「位至三公銘帯双雲紋鏡」のレプリカ、10年の方4名には「鍬ペンダント」と「三角縁神獸車馬鏡形チョコレート」をプレゼントさせていただきました。

総会後には、保坂康夫会長による記念講演「黒曜石と縄文人の生活」が行われ、特別展や県外研修につながる内容を学ぶことができました。

お忙しい中、総会にご出席いただき、ありがとうございました。



第40回特別展 「星降る中部高地の 縄文世界」

令和5年7月8日(土)～9月3日(日)の期間、第40回特別展『星降る中部高地の縄文世界～黒曜石ネットワークによる物流と人流～』が開催されました。8月20日(日)には、高橋龍三郎館長による基調講演のほか、星くずの里たかやま黒曜石体験ミュージアムの大竹幸恵氏、明治大学黒曜石研究センターの栗島

義明氏、元埋蔵文化財センター所長の小野正文氏、身延大学の保坂康夫氏による講演・座談会が行われ、多くの方々にご参加いただきました。オンラインでの同時配信も好評でした。

石器づくりに欠かせない特別な素材として重宝されてきた黒曜石。なかでも信州産の黒曜石は良質なことで知られ、広く流通していたことがうかがえます。その需要に応じ、八ヶ岳南麓の集団によって組織的な交易が行われるようになりました。今回の特別展では、「交易」がもたらした繁栄のもと生み出された土器や土偶など、芸術性の高い日本遺産構成文化財をはじめ、その文化的影響を受けた交流地域の資料を一堂に集め、中部高地に花開いた魅惑の縄文ワールドを満喫していただきました。51日間の会期中、県内外から多くの方にご来館いただき、7,000人近くの入館者がありました。夏休み期間であったこともあり、7月30日(日)のワークショップ也大盛況でした。

協力員のみなさまには、特別展に引き続き列島展まで、長期間にわたる当番活動にご協力いただき、感謝いたします。



県外研修 11/11

星くすの里たかやま

黒曜石体験ミュージアム

星ヶ塔ミュージアム矢の根や

今年は長和町の「黒曜石体験ミュージアム」と下諏訪の「星ヶ塔ミュージアム矢の根や」を訪れました。特別展でも紹介されていた黒曜石のふるさとを巡り、石鏃づくりで石の加工の難しさを体感しました。2つの館の展示や解説により、信州の黒曜石が山梨の縄文遺跡にどのようにもたらされたのか詳しく知ることが出来ました。黒曜石の魅力を再認識した一日でした。

【協力員さんの研修記】

北村 正仁さん

黒曜石尽くしの研修旅行でした。

はじめは長和町大門にある「星くすの里たかやま黒曜石体験ミュージアム」で、黒曜石（ここでは光偏）鉱山展示室を案内され、解説を聞いた後、黒曜石で石鏃を作る体験を行いました。慣れない手付きでなんとかヤジリらしいものができました。

その後、下諏訪に下り、昼食をいただきました。「星ヶ塔ミュージアム矢の根や」では、館長が微細な解説により、山梨県の金生遺跡の人達が苦勞して黒曜石（ここでは日偏）を採掘したかを物語ってくれました。思うに、黒曜石は日本海派で、黒曜石は太平洋派ではないか？そして両派は結構論客で対立しているように感じられた体験でした。

因みに「矢の根」というのは石鏃のことだそうで、ここでも「矢の先」ではないだろうかと思いましたが……。

もう一つ気になったのは、石鏃も石偏ではないのかな？変な事を考えながら、諏訪大社の拝殿だけを参拝して帰路につきました。



内藤 敏夫さん

「山梨県立考古博物館40周年記念特別展」において、マグマから出来た火山ガラスの黒曜石の展示には圧倒されました。八ヶ岳山麓の縄文人によって掘り出された黒曜石が、利用できる物と廃棄の物に選別され、麓のムラからムラへ、やがて全国へと運ばれ、匠の細工によって生活に必要な形態に変化しました。マヤ人（族）が、50年位前まで黒曜石を使用して狩りをしていたことを聞くと、黒曜石で作られた石鏃は、縄文人の生活に大きく役立ち、感動をもたらしたことが分かります。

男女倉原産地群や諏訪原産地群などは、地理的に山深いところです。縄文人が生活の中で星くすのようにピカピカ光る黒曜石片を見つけ、生活に使用されるまでどんな努力をしたのでしょうか。

「星くすの里たかやま黒曜石体験ミュージアム」での矢じり作成体験は、僅かな時間でしたが、必死に作成しました。縄文人の生活の一端に触れる機会でした。

「星ヶ塔ミュージアム矢の根や」に展示された、星ヶ塔遺跡の黒曜石採掘原寸大ジオラマには感動しました。解説者の活動の工夫と経験豊富な人生の抑揚を感じながら、分かりやすい説明を受けました。中でも北杜市の金生遺跡から出土した70キロ余りの黒曜石が、金生遺跡で生活していた住民によって星ヶ塔遺跡で採掘され運ばれたことを聞くと、研究の成果など改めて考古学のすばらしさを感じます。

私たち協力は、本年度は特別展や巡回展が実施され、長期間の活動がありました。県内外からの来館者もきっと気持ちよく楽しんで見学して貰えたと思っています。

私たち協力員も、健康に気をつけながら活動の機会を通じて切磋琢磨し、頑張りたいと思います。研修企画や資料等の準備をいただいた事務局や職員の皆さんに感謝致します。次回の研修も楽しみにしています。



乙黒 孝江さん

黒耀石のあの黒に惹かれて研修に参加しました。星の様にキラキラと輝く美しい黒耀石～そんな石が本当にあるのか？とっていました。

少し肌寒い日でした。諏訪に向かい黒耀石体験ミュージアムに到着。すぐ黒耀石の矢じり作りに入りました。本物の石を手に取り、色・重さ・輝きを見ました。小さい石なのに重かったです。

硬い石でなかなか割れず、補助の方の手を借りて三角形の矢じりに挑戦しました。どんな三角形にしたいのか？と質問されても答えることも出来ず、ひたすら石を割りました。

完成品は小さいけれど輝いていて満足でした。楽しい研修をありがとうございました。

**渡辺 ひとみさん**

「星くずの里たかやま黒耀石体験ミュージアム」では、星糞峠の黒耀石の歴史や石器作りの方法を知ることができ、勉強になりました。矢じり作り体験では、黒耀石が固すぎて割りにくく、形にならず苦戦しました。

「星ヶ塔ミュージアム矢の根や」では、星ヶ塔の由来や青塚古墳の事を初めて知りました。説明してくれた職員の方が「タモリさんがTVロケで訪れた」事を熱弁されていたのが印象的でした。長野県が黒耀石の産地である事を初めて知りました。

清水 一茂さん

旧石器時代3万年前から、火山が生み出した黒耀石が矢じりやナイフなどに使用されています。星くずの里たかやま（長和町）は、平成30年には日本遺産に認定に。

展示説明では、87万年前に火山噴火があり、溶岩流が発生しました。そして鷹山川に削られて黒耀石の原石が現れ、旧石器人が拾いに来るようになりました。そして、石器を加工して、道具や加工具などに利用しました。また、ムラへ運ばれて広まって行きました。

この採掘の場所の画像をみると、鉱床中の黒耀石は直径1mほどでしょうか。縄文時代に標高1500mの現場まで行って、作業して、加工して、持参して、麓まで運んだりを、すべて歩いて行うのは大変なことですね。

星ヶ塔黒耀石山地遺跡は、霧ヶ峰の鷲ヶ峰の北西の星ヶ塔山の東斜面1500mにある黒耀石採掘遺跡です。ここからは5700年前と3000年前の黒耀石採掘坑が発見されています。産地分析によると、東北から東海地方まで広い範囲に供給流通しました。大正9(1920)年鳥居龍蔵の調査、昭和34(1959)年藤森栄一の調査により明らかに。平成27(2015)年には国史跡に指定されました。霧ヶ峰には日光キスゲなどを見に行っていました、知らなかったです。

昼食美味でした。また、シナノゴールドも美味しかったです。ありがとうございました。

安原 久美子さん

私が博物館でボランティア活動を始めた頃、縄文時代のハヶ岳周辺が日本で一番人口密度が高かったと聞き、とても驚かされ、なかなか理解・想像もつきませんでした。しかし、二つの博物館を訪ね、学芸員の方のお話を聞いたり展示パネルやジオラマを見て、万年単位で人々が黒耀石を採掘するために集まり、また各地へ散っていたことが良くわかりました。それでも、動力がない時代に黒耀石が海を渡ったり東北の方まで渡っていった、その時間と軌跡には、とても興味がわきました。つい自分を基準に考えてしまう私ですが、縄文人達がゆったりした時の流れの中で生活していたのだと改めて思いました。

私には貴重な研修旅行で、鉱山跡へもぜひ行ってみたいと思いました。



田丸 進さん

黒曜石で矢じりまがいの物を作り、その加工性の良さと切れ味を体験し、黒曜石を必要とする縄文人たちが、採取や持ち帰る苦勞をもものともせず、遠くから何日もかけて星叢峠まで来た理由が解った気がします。当時の情報伝達や移動経路が発達していた事も推測できました。

**石原 政至さん**

黒曜石…旧石器時代から弥生時代にかけて使われてきた刃物の素材。和田峠や伊豆など産地が偏在しているので、古くから交易品として使われてきた。このぐらいの知識しか持ち合わせていない私にとって、和田峠近くの「星くそ館」での研修では多くのことを学ぶことができた。

- この黒曜石は87万年前の噴火でできた火山性岩石、ガラス質で鋭利な割れ口を持っている。石は固く硬度は5、なかなか加工できない。ましてやひもを通す穴などはどのようにして開けたのか。
- 生産地でもあるここは、標高1500メートルと高く冬はとても寒い。管理していた人たちはもっと低いところに住んでいたのか。黒曜石は交易品。いったい何と交換したのか。肉や毛皮や魚の干物などか。交易はどこでしていたのか。ここか、またはここから全国各地に行商にでも出かけたのかな。そうすると黒曜石はお金みたいに使われたのかな。館には長和小児童の壁新聞が貼ってあり、交易は「友情のあかし」と書いてあった。なるほどそんな解釈もできるのか。

など、知識が増えることによって疑問もいくつか出てきたことをうれしく思っている。こうした貴重な機会を設けてくださった事務局、また一緒に研修に参加してくださった皆さんに心より感謝したい。

**Kさん**

今回の研修は、今年の「特別展」や「ブラタモリ」「謎解き体験」などを見て、非常に興味を持って参加しました。しおりも事前に届き大変良かったです。現場が少しでも歩けたらもっと良かったです。

河野 尚子さん

「ガシッ！ガシッ！ゴリッ！」私達は11月11日県外研修で「星くすの里たかやま」を訪ね、黒曜石で石鏃作りを体験しました。縄文時代の人達はどんなに辛抱強かったことでしょう。熱心に削り上げた矢じりは、とても狩りに役立つとは思えない出来で、あらためて縄文人の力強さに感心しました。心は少しばかり彼らに近づいた気分です。

星が塔ミュージアム「矢の根や」で見た黒曜石採掘坑のジオラマは、原寸大で見事なものでした。また、採掘イメージのパノラマイラスト前では、生き生きとした縄文人の様子を現代と交錯させながらの説明で、時々笑いも生じる楽しい時間は忘れられません。縄文時代から現代までの悠久の時を一気に身近に感じさせる研修はとても有意義でした。「ああ、私達も彼らのように何も無い時、不便な事（たとえば災害）にあっても力強く生きなければ。」と感じたのです。

研修を企画された方々、ありがとうございました。

丹澤 恵美子さん

キラキラ輝く美しい黒曜石。今回は長野県の黒曜石原産地での研修でした。

最初の見学場所は、長和町の「星くずの里たかやま 黒曜石体験ミュージアム」でした。学芸員の方に館内の解説をしていただき、その後、黒曜石の矢じり作りに挑戦しました。指導してくださる方から、黒曜石の剥片を矢じりの形の二等辺三角形になるように削る、との指示がありました。加工ペンシルで削るのですが、なかなか思うように削れず黒曜石の硬さを実感しました。でも、助けていただきながら、何とか私だけの黒曜石の弓矢が完成しました。

午後は、下諏訪町の「星ヶ塔ミュージアム矢の根や」の見学でした。学芸員の方に解説していただきながら、館内を見学しました。星の塔黒曜石原産地遺跡の、実際の採掘坑を忠実に再現した原寸大のジオラマは、見応えがありました。

2階のテラスからは前方後円墳である青塚古墳の石室を見ることができました。

当日は、車窓から信州の紅葉も鑑賞でき、有意義な一日となりました。研修を企画・運営してくださった事務局の皆さんに感謝いたします。



県内研修 2/17

宮光園・龍憲セラー
メルシャン勝沼ワイナリー
ワイン資料館

今年度は、県外・県内研修ともに晴天に恵まれました。雲一つ無い青空の下、勝沼ぶどうの国文化館駐車場をスタートし、龍憲セラー・宮光園・ワイン資料館を、2名の講師の方々とともに巡り、近代産業を支えた郷土の偉人たちに、想いを馳せることができました。

【協力員さんの研修記】



今村 美知子さん

協力員になり初めて県内研修に参加させて頂きました。ワインの歴史について学ぶことができ、大変貴重な時間を過ごすことができました。印象に残ったのは龍憲セラー。普段は見学できない場所を案内して頂きタイムスリップしたような感覚でした。講師の解説は分かりやすく、山梨のワインは素晴らしい方々の努力で今があることを理解できました。関係者の皆様ありがとうございました。

宮城 栄子さん

青空がひろがり、空気が澄んだ冬の日、県内研修へ参加させて頂きました。山梨に生まれ育ったにもかかわらず、日本ワインについて知らないことが多く、特に「龍憲セラー」の内部の見学が印象的でした。日本最古のワイン貯蔵庫（セラー）の壁一面のレンガが地元で作られたこと、明治の堅牢な半地下式はヨーロッパの貯蔵技術を導入し、同様のものを運搬することは困難であることに、日本ワインの醸造への強い決意を感じました。また、宮光園とメルシャン勝沼ワイナリーワイン資料館も、それぞれ元館長小野さん、上野さんお二人に豪華な深掘りした解説をしていただき、大変貴重な見学となりました。

甲州市とともに茨城県牛久市が日本遺産に認定されたことも知り、機会があればぜひ訪れてみたいと思いました。

今日はありがとうございました。



笹本 弘司さん

明治時代の始め、日本の近代化が急速に進む中、政府主導の下に官営のワイン醸造が始まりました。江戸時代からブドウの産地として知られていた山梨県は、まさにその先駆けでありました。明治10年、現在の甲州市勝沼に日本初の民間ワイン醸造所が設立され、日本産のワイン醸造の夢を抱く「土屋龍憲」は社命によりフランスへ渡り、およそ1年半後に帰国し、本場で学んだブドウの栽培法と醸造技術を駆使し、日本固有種の甲州ブドウで本格的なワイン醸造を始めました。

上記の説明を受けて、研修が開始されました。

龍憲セラーは、明治31年ごろ、土屋龍憲が造った葡萄酒貯蔵庫でした。かつては貯蔵庫の上には建物があったと思われ、北東隅から下る螺旋階段が残っていました。このような貯蔵庫は地区全体に多数見ることができます。



宮光園は、ワイン産業の先覚者・宮崎光太郎が自宅に整備した醸造所で、市民や醸造者が世界中から訪れ交流を楽しむ様子が展示物からよくわかります。当時のワイン醸造や観光葡萄園の様子を知ることができる貴重な展示物および施設と感じました。(昭和22年に昭和天皇の御巡幸があったことも展示物で説明されていました。)

メルシャン勝沼ワイナリーワイン資料館の建物は、明治37年に宮崎醸造所の第二工場として建設されました。昭和24年「日本連抽(株)」が「日清醸造(株)」になり、メルシャンブランドが誕生します。その後何回かの会社合併・独立を経て、平成22年にはキリンホールディングスの完全子会社となり、現在に至っています。資料館は現存する木造式のワイン醸造所としては日本で最も古い建物を使用しております。また昔の醸造器具や明治10年代の国内最古のワインも展示していました。

今回訪問した「龍憲セラー」「宮光園」「ワイン資料館」は、ワイン醸造や観光葡萄園に関する膨大な資料群や現物が多々あり、大変勉強になりました。日本のワイン造りはここから始まったと感じました。

最後に、今回の見学に際し解説をして頂きました「信玄公宝物館館長：小野正文様」「元ワイン資料館館長：上野昇様」ありがとうございました。今後とも今回のような企画をお願いします。

宮本 智子さん

隣町に住んでいますので、二人の青年のことや、宮光園、メルシャンのことは知っていましたが、説明を受けたのは初めてでした。私達がワインをおいしく飲めるのも、先人達の努力の結晶だったのですね。

赤・白・ロゼ・それにオレンジワイン・スパークリングワイン、またシュールレーリーというつくり方など、日々進化を続けるワイン。ますます目が離せなくなりそうです。

**幡野 明世さん**

今回の研修では、専門家の方々の貴重な解説があり、ただ立ち寄っただけでは得られない内容の濃い研修でした。また伺ったお話の中で、ワインについては製造方法の発展や違いから色々な味わい方があると知らされたので、今後の楽しみとして、ワインを購入して自分自身もワインの味の理解を深めて行きたいと思いました。また、見学地の龍憲セラーなどは、今回の解説を聞かなければ見過ごしてしまうようなところでした。一見すると、戦時中の防空壕にも思えましたが・・・。

地元に住んでいながらぶどう特産県の山梨がぶどうによってどのようにして発展を遂げてきたのかを見過ごし、改めて今回の研修を受けてみて知識不足を恥ずかしく思いました。郷土の発展の歴史を山梨県人として是非知っておかなければいけないと痛感した研修でした。

今後は今回受けた研修の知識を生かして、山梨を訪れる人たちに紹介していけたら、と考えています。

宮崎 昇さん

2月17日、天気も良く過ごしやすい中、信玄公宝物館館長 小野正文氏と元メルシャン勝沼ワイナリーワイン資料館館長 上野昇氏の案内により研修が行われた。

小野正文氏からは龍憲セラーおよび宮光園の解説をしていただいた。龍憲セラーとは随分と尖った名称だが、言わずもがな明治時代にフランスに渡り、ブドウの栽培と醸造技術を学び持ち帰った二人の若者の一人、土屋龍憲からきた名称だ。この研修が無かったら全く知りえなかった有形文化財。

小野氏は、セラーの名称は違和感があり、本来は葡萄貯蔵庫が正しいのではないかと仰っていた。資料にもそのようなことが書かれていて納得した。又、勝沼地区には40を超えるワイナリーがあり、そのすべてで経営が成り立っているのは不思議だとも話されていた。各社、経営手法はもちろんだが需要がそれだけ有ると言う事か。

日本では江戸時代に既に葡萄酒のようなものが作られていたり、宮光園の名称は、葡萄酒の販売を手がけた宮崎光太郎からきたものかと思ったら、資料によると明治22年の天皇巡幸に際し、光太郎の娘婿が由来の説明をしており「宮様の光栄に因みて宮光園と名付けたる」と書していて、理解した。

メルシャンワイン資料館の案内は、上野昇氏よりしていただいた。現在の「メルシャン」に至るまでは、資料館の年表にて説明されたが、一度聞いただけではとても記憶に残らないほどの、醸造所の解散、会社設立、組織改編、吸収合併などを繰り返していたようだ。上野さんの説明は時間内では話しきれない程のボリュームがあり、更に上野さんのワイン愛も感じられた。以前此方でワインのイベントがあり、訪れた事があったが、敷地内に「ボルドウ神社」なるものが有ったとは全く気がつかなかった。

私は車の運転があるので飲むことができなかったが、娘は友人とメルシャンワインを美味しくいただいたようであった。

事務局のお二方には大変お疲れさまでした。

篤木 りえさん

令和6年2月17日、晴天の中、県内研修。

個人では中々見られない「龍憲セラー」。外観では想像出来ない、綺麗なレンガ積み。天井部分に当時の新聞が貼ってあるなど、トリビアも有り！

宮光園、メルシャンワイナリーも詳しく解説して頂き、ありがとうございました。

ワイン醸造に政府の強い後押しがあった理由に酒石酸(ロッシェル塩)採取があり、兵器活用と知り負の感情を覚えました。世界へと誇れるワインを目指し造り続けてきたワイナリーの皆様に、同県人として、とても誇らしい気持ちとなりました。

**山本 保男さん**

ワイン王国山梨県には80以上のワイナリーが全域に広がっています。そんな中、特に甲州市勝沼地域はその約半数を占めており、今回の研修でそれらの起源について詳細に触れることができました。

高野正誠、土屋龍憲両名の留学を起源とする140年以上に及び歴史と文化の伝承によって、現在のワイン産業発展に繋がっていることが理解できます。龍憲セラーの構造、煉瓦等、フランスで学んだ知識を基に構築した背景をみて取れます。

宮光園では和洋折衷建築様式による景観、地下貯蔵庫等当時の構築状態がしっかり保存されており、近代産業遺産として重要な存在であることが良くわかりました。また、宮崎光太郎のワイン醸造、商品化に取組んだ沿革史はとても興味深い内容でした。

メルシャン資料館では歴史的な建物や展示物が豊富にあり歴史の重さを感じます。当時のワイン醸造に関する技術力、環境等を体感することができました。

今回ガイドをしてくださった小野先生、上野先生の丁寧な解説がとても分かり易く、詳細なところまで理解でき、とても有意義な研修でした。

協力会の活動を振り返って...

【協力員さんの活動体験記】



藤原 尚美さん

体調に波があり、特別展や列島展の当番以外の活動にあまり参加できなかったことは申し訳なく思っています。

何回かの活動の中で、特別展では、監視中に来館者から質問を受けたときに事前に図録などで学習しておくことの大切さを痛感しました。こどもまつりや学校見学の体験補助では、「勾玉作り」に参加しました。子どもたちの多くが初体験で真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。学校の体験補助では、指導者の説明を受けて作業をする子どもたちのテーブルの間をまわってわかりやすくアドバイスをすることの難しさを感じました。時間内に完成するようにするために、つい手助けをしてしまい、子どもたちにとって良かったのか考えてしまうこともありました。

協力会の県外研修は、黒曜石の産地や発掘の様子、その利用方法、交流の広がりを知る良い機会でした。今後とも県外研修があれば参加したいと思います。



村松 暢子さん

「歴史好きには 楽しいお手伝い」

定年退職をして歴史が好きだったので、以前よりやってみたかった協力員に応募。展示会ごとの勉強会やボランティアガイドの研修、県外・県内研修に参加させていただき、応募して本当に良かったです。（専門の方の解説で展示だけ見るよりわかりやすいです。ただ、その時は「なるほど」と思っても全部覚えていられず悲しい。）ボランティアガイドは、研修は受けただけれど、まだやれる自信はありません。

イベントの火起こし体験の研修を1度受けただけで、2年後にお手伝いをしましたが、忘れていたこともあり、アドバイスがうまく出来ませんでした。慣れるまでは毎年研修を受け、お手伝いにも参加した方がよいと思いました。

特別展の時の当番で1番心配なのはショップです。毎回ドキドキです。R5年度は配置が2人となることが多く、安心して対応できています。

総じて歴史が好きなお私には、自分のためになることが多いので楽しいです。そのお返しに協力もいっぱいしなければと思いますが、パートの仕事と家事もあるので、出来る範囲で長く楽しみながらお手伝いしていきたいです。

これからもよろしくお願いいたします。



令和5年度は、開館40周年の特別展や列島展が開催されたり、コロナのため制限されていた各イベントが再開されたりして、協力員さんにたくさんご支援いただく場面がありました。当番や補助の依頼をいつも快く引き受けてくださり、本当に感謝しております。一緒に活動している中で、協力員さんの笑顔が来館者のみなさまの楽しい思い出につながっているように感じました。来年度もご協力よろしくお願いいたします。（事務局）

